

教育の新しい形を求めて ——「国際交流ファシリテーター」事業の回顧と展望

Towards a New Form of Education
:Retrospect and Prospect of the “International Exchange Facilitator” Program

(執筆順) 佐々木寛・宮本裕美・羽田幸恵・中原滯佳・小宮山智志・山田裕史

「国際交流ファシリテーター」事業——2つの基本理念

佐々木寛（国際学部教授）

学生自身が創造的教育の主体であるということ

今日の教育現場において、ワークショップやファシリテーションということばは、もう目新しいものではなくなった。文部科学省も、近年「アクティブ・ラーニング」や「対話的な学び」などと喧伝するようになり、大学入学前にすでに「ワークショップ慣れ」している学生たちが多く入学するようになった。しかし、本学（新潟国際情報大学）では、すでに15年前から、「国際交流インストラクター」事業として、同じ目的や方式による教育実践が始まっていた。

事の始まりは、2005年の新潟県国際交流協会との共同企画であった。椿課長（当時）が相談に私の研究室を訪れ、交流協会が準備を進める写真展に大学生が参加する企画内容を共に考えた。貧困や紛争などに見舞われた世界中の子どもたちの現実を映した写真の前で、本学の大学生が、小学生などに説明をするというのが当初のアイデアであった。しかし、「説明」というより、「対話」、つまり一枚の写真を見ながら、参加者みんなでそれがどう見えるのかを話し合う方法がいいのではないかと考えた。

結果的にその企画は大成功し、何よりも参加した学生諸君が目や輝かせ、熱心に取り組み、目に見えて成長した。これまでいわゆる「勉強」が苦手だった学生でも、学びの上で自分が単なる〈客体〉ではなく、他者に伝える役割を担う〈主体〉であると自覚するようになると、まるで生まれ変わったように学ぶ姿勢にも変化が生じた。私も改めて、複雑な世界の現実について、その意味や構造を一方向的に「教える」のではなく、「共に考える」ことの重要性に気がつくことになった。

当時は、新しいカリキュラムの実践として、学生自身が授業内容をも構想する「自主講座」を創設しようと努力したこともあったが、当時の医学部出身の学長などの無理解から頓挫していたという事情もあった。学生が学ぶ〈主体〉となるような新しい教育方法を何とか実現しようと模索していた最中でもあり、この国際理解教育を通じた実践は、ひとつの活路でもあった。

しかし、その後の道のりも決して平坦ではなかった。もっとも大きな障害は、大学経営陣の古い思考と体質であった。予算はなかなかつかず、制度的な妨害も無数に受けた。今思えば、日本のごく田舎の小さな大学では「普通の」反応だったと言えるかもしれない。先端的な新しい試

みは、常に古い体質と衝突する。しかし、この試みを現在に至るまで支えてきたのは、この新しい試みに参加し、生き生きと学びの喜びを表現し続けた学生たちであり、この「ボトムアップ」の教育思想に共感し、力を貸してくれた数々の同僚たちであった。

転機は、2007年に文部科学省の大規模な助成金事業である「現代GP」に採択されたこと、そして本学の第一回目の外部評価で、教育分野において唯一、この「国際交流インストラクター」事業が高い評価を受けたことにあった。その後も時間はかかったが、本事業の価値は次第に学内外に浸透するようになり、さらに国際学部では、本事業のための新しい教員を公募、採用するまでに至った（そこで採用されたのは、現在、本事業を中心的に牽引する山田裕史准教授である）。現在では、本事業に学部学生の頃から参加し、卒業後は大学院へ進学した3名のスタッフ（推進委員）も加え、本学の学部教育のひとつの柱として機能するようになっていく。

現在では、事業名をそれまでの「国際交流インストラクター」から改め、事業本来の内容にふさわしい「国際交流ファシリテーター」に変更している。「インストラクター」は、いわば「指導員」であり、ワークショップや対話を通じて相互学習を試みる本事業の原則を考えれば、「促進者」という意味の「ファシリテーター」ということばがふさわしい。「ファシリテーター」ということばは、事業発足当時はまったく人口に膾炙していなかったが、近年、社会にも広く浸透することになったため、先の山田氏の提案により改名を決めた。

そもそも、真の〈教育〉とは、ソクラテスや、パウロ・フレイレ、ジョン・デューイなどを持ち出すまでもなく、知識のあるものが知識の無いものに知識を教授するという、いわば「トップダウン」の発想とは真逆のところにあると言ってもいい。しかし、日本における近代以降の教育は、高等教育も含め、依然としてこの「トップダウン」、あるいはピラミッド型の権威主義的イメージがこびりついていて、学習者の内発的な学ぶ力を阻害してきた。若者たちは、時代遅れの「学力」で輪切りにされる受験の経験を経て、大学に入る頃には、自己肯定感を著しく低下させ、ただ権威に従うことを規律されただけの、不安に満ちた、無力な存在として私たち大学教員の前に現れる。しかし、このような主に明治期に形成された、東京帝国大学を頂上としたピラミッド型教育システム自体が、21世紀には著しく機能不全を起していることは、すでに多くの指標に基づく指摘があるだけでなく、昨今顕著となっている、財界・官界・政界など日本の指導層そのものの劣化や機能不全からも看取することは難しくないだろう。

相互啓発や「創発」を旨とする「ファシリテーション」を主軸に据えた教育実践は、理念的には、まさにソクラテス以来の「対話」を教育の場に再び取り戻す試みである。時の国家権力が認定する知識の断片を上から詰め込むだけの近代的な「銀行型教育」（フレイレ）を脱し、自らの内発的実践を通じて真に学ぶ教育（デューイ）を再生させ、学ぶ者に、学びの真の愉しみとその方法についての“主権”を取り戻す試みである。いうまでもなく、この「古くて新しい」学びの回復こそ、高度に不確実な21世紀を生き抜き、新たな時代を切り拓くための真の「学力」を次世代に育むための鍵となるだろう。

〈地域＝公〉の中で学ぶ

本事業のもうひとつの理念は、学びの〈場〉を開放することにあった。すでに述べたように、本事業は創設当初から、新潟県（行政）との連携によって実施されてきた。県の教育委員会も介して、大学と小中高校を結ぶ役割を、現在も県の国際交流協会が担っている。またそれだけにとどまらず、学生の派遣や移動などに伴う費用を賄うための県の予算措置も、これまで減額される

ことなく続いてきた。

こういった行政との協働に加え、本事業は、複数の大学間にまたがった「インターカレッジ」の枠組みで進められてきた。これまで、敬和学園大学、新潟県立大学、上越教育大学、新潟大学という順番で、県内参加大学も徐々に拡大してきた。いずれも、本事業の理念に共感してくださった各大学の先生方の献身的な尽力に負うところが大きい。今では、5大学共同のセミナーや合宿も恒例となっている。

そもそも、大学生が地域の小中高校へと出かけてワークショップや「授業」を行うという建付けなので、事前打ち合わせも含め、本事業は学生自身が「社会人」としての責任やマナーを学ぶ機会ともなる。時には現場の先生方から厳しいご指摘を受けることもあるが、それが学生にとってはとても良い刺激や学びになる。また逆に、小中高校の先生方にとっては、普段よりも生き生きと楽しそうに参加する児童生徒を見る中で、学生によるワークショップが新たな授業方法についての学びやヒントとなる場合も少なくないだろう。前述の「アクティブ・ラーニング」が、実際の教育現場ではえてしてワークショップ技法などの形式的な適用にとどまってしまう、むしろ真に「アクティブ」な児童生徒の成長を阻害しているような皮肉なケースも多く見られるが、本事業は、いわば「活動的な学び」が本来はどのようなものであるのかについて、教育現場に再認識させるねらいも秘めている。

本事業は、その出自から「国際理解教育」がテーマであったが、世界の問題を、地元の大学生が、地元の児童生徒と共に考えるという、いわばローカルな試みである。しかし、グローバルな問題とローカルな問題が密接に連関し合う「グローバル」な現代世界では、このような地理的・空間的な境界を超えた世界認識に基づく教育実践は、むしろ必須になっているといえるだろう。ここ数年は、「世界の問題はまさに身近な地域に存在する」、あるいは、「世界の問題の解決方法は、まさに日常の実践に存在する」という認識の下、自分たちで身近な地域の実態を調べ、それをワークショップに活かす試みも増えてきた。新型コロナウイルスが世界を覆った今年度以降は、単なる「グローバル」を超えた、生命圏と地球環境全体を視野に入れる「プラネタリー（惑星的）」な認識枠組みも芽生えている。

また、「ファシリテーター」となる大学生たちから見れば、本事業は、自分たちよりも年少の地域の後輩たちに、真の学びを提供する機会でもある。その意味で、展開されるワークショップはいずれも、世代を横断した若者たちが、“地域の未来に責任をもつ”ことを学ぶプロセスであるとも言える。学生たちが、単位や定期テストといったルーティーンに支配される大学のキャンパスを飛び出して、世代の枠を取り払った、より広い多様な実社会の中で試行錯誤し、何よりも、地域社会に貢献する喜びを見いだすことは、まさに本事業が真に目指すところである。つまり本事業は、教育において〈地域＝公〉を再発見し、その〈公〉を担い、創出する「民主的リーダーシップ」を涵養する試みであり、その意味で、広義の「政治（公民）教育（citizenship education）」の試みにほかならないのである。

大学の新しい道程

今思えば、本事業を現在の形につくりあげる過程で、私が14年前に訪問した、スペインのバルセロナ自治大学での学びも少なからず影響を与えている。本事業の最初のアシスタントを務めてくださった本学の卒業生、新津厚子さんの最初の留学先がバルセロナ自治大学だった。ヨーロッパでも最先端の研究教育活動を展開していた同大学の研究所長（当時）マリア・カナダスさんか

ら伝えられた、「これからの大学は、研究は大学の“外”で行い、むしろ実践を大学の“中”で行うのだ」ということばは、今でも忘れられない。同大学の授業は、当時すでに、ほぼすべてが講義形式ではなく、ワークショップ形式で行われていた。授業（学内の教育）はまさに、「実践」の場であった。

現代の学問（研究）および教育は、概して極度に専門分化や縦割りが進み、公共との有機的な連関や弾力性を失い、劣化している。どちらも、マネー（資本）の論理だけが肥大化し、大学においてすら、もうかる研究、もうかる教育、つまり「今だけ、カネだけ、自分だけ」の論理が跋扈するようになった。職（ポスト）を脅かされ、研究費を減らされ、「競争的資金」の申請書類を書くことに汲々とする研究者たちは、もはや大学や学問の社会的責任について考える余裕を失っている。

筆者は、「国際交流ファシリテーター」事業が、今後も大学における研究や教育のこのような隘路を突破する可能性をも秘めていると考えている。最先端の〈知〉が、公共との有機的な対話の中から生まれる「オープン・サイエンス」が求められる時代に、本事業は、地域の中で呼吸し、地域に貢献することで世界に貢献する大学の未来像への新しい道程を示している。

「国際交流ファシリテーター事業」の歴史

宮本裕美（本事業推進員）

本節では、最初に国際交流ファシリテーター事業（旧国際交流インストラクター事業）の各年度事業報告書を参考に、国際交流インストラクター事業の誕生から国際交流ファシリテーター事業に変化した現在に至るまでの主要な出来事を年表にまとめ、年表を「萌芽期」「基盤準備期」「発展期」「変革期」の四つの時期に分類し、各期の特徴を述べる¹。

第一期は、2005年4月から2006年8月までとし、萌芽期と名付ける。

第二期は、2006年9月から2007年3月までとし、基盤準備期と名付ける。

第三期は、2007年4月から2013年11月現在までとし、発展期と名付ける。

第三期は、さらに細かく、以下のように四つに区切る。

- (1) 2007年4月から2008年3月まで
- (2) 2008年4月から2012年3月まで
- (3) 2012年4月から2016年3月まで
- (4) 2016年4月から2018年3月まで。

第四期は、2018年4月から2020年12月現在までとし、変革期と名付ける。

以上の四つの時期に分類した理由と表は以下の通りである。

第一期 萌芽期：2005年4月から2006年8月まで

国際交流インストラクター事業が誕生してから、新潟国際情報大学と新潟県国際交流協会の二者が協力をして本事業を展開している。また、主な活動としては、学校現場には派遣されず、国際交流イベントでのワークショップにおけるファシリテーター役を務めることであったことから、第一期を2005年4月から2006年8月までに指定し、これを萌芽期と名付けた。

また、2006年度においては、8月に開催されたイベント「世界体験ツアー」での活躍が主な活動である。同年10月からは学校現場への派遣が開始されたため、年度途中ではあるが区切りを設け、これを第二期に分類した。

¹ 本節は、南場裕美「国際交流インストラクター事業の成果と課題」上越教育大学大学院修士論文、2014年を改変し、再構成したものである。

表 1 国際交流インストラクター事業年表 萌芽期：2005年4月から2006年8月まで

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2005	4		新潟国際情報大学と(財)新潟県国際交流協会との共同プロジェクト開始		
	5	25	情報文化学科会議にて「広報委員会より提案―「国際交流インストラクター」の試み」佐々木寛先生	新潟国際情報大学	
	6	1	イントロダクション：概要説明	新潟国際情報大学	
		10	ワークショップとは何か―方法の問題：佐々木寛先生	新潟国際情報大学	
		14	写真の20世紀―メディアとしての写真：越智敏夫先生	新潟国際情報大学	
		21	世界の不等のとらえ方―アジアと世界：高橋正樹先生	新潟国際情報大学	
	7	5	模擬ワークショップ：広瀬貞三先生、沢口晋一先生、矢口裕子先生、白井陽一郎先生、越智敏夫先生、高橋正樹先生、熊谷卓先生、ブラーソル先生、申銀珠先生、小林元裕先生、安藤潤先生	新潟国際情報大学	
		6	異文化理解の落とし穴：長坂格先生 (財)新潟県国際交流協会、万代島美術館などの方々を招いての模擬ワークショップ	新潟国際情報大学	
	8	8 ～ 26	新潟県立万代島美術館・TeNY テレビ新潟・(財)日本テレビ文化事業団主催「写真展 地球を生きる子どもたち」にあわせて、国際理解のワークショップを開催し、その際のインストラクター(ボランティア)として派遣	朱鷺メッセ	
	2006	5	17	イントロダクション(顔合わせ)	新潟国際情報大学
		24	講義(概論)：平和問題の構成―ジェノサイドと人権の世紀 佐々木寛先生	新潟国際情報大学	
		21	JICA協力による海外青年協力隊隊員の講演(2名)	新潟国際情報大学	
7		5	新潟大学 NGO 市民講座企画参加	新潟大学	
		29	国際理解セミナー	朱鷺メッセ	
		30	AFS「中・高校生のための国際理解セミナー」	万代市民会館	
		11	2006年度国際交流インストラクター委嘱状授与式	新潟県国際交流協会	
			朱鷺メッセ世界体験ツアー①	朱鷺メッセ	
		16	朱鷺メッセ世界体験ツアー②	朱鷺メッセ	
		22	朱鷺メッセ世界体験ツアー③	朱鷺メッセ	
		24	朱鷺メッセ世界体験ツアー④	朱鷺メッセ	
		28	朱鷺メッセ世界体験ツアー⑤	朱鷺メッセ	

(2005年度、2006年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

第二期 基盤準備期：2006年9月から2007年3月まで

前述にもあるように、国際交流インストラクター事業において、活動の場が学校現場へと変化した。国際交流インストラクターの学生たちが新潟県内の小・中・高校に派遣され、国際理解教育のワークショップを行うようになった。これにおいて、国際交流インストラクターの大きな進展と考えたため、第二期を2006年9月から2007年3月までに指定し、これを基盤準備期と名付けた。

表2 国際交流インストラクター事業年表 基盤準備期：2006年9月から2007年3月まで

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2006	9	15	新潟県内の小・中・高校への国際交流インストラクター派遣を開始		
	11	18 19	中間評価合宿	八海山麓サイクリングターミナル	
		25	特別研修 学生の視点から考える ～新潟と中国～ -テレビ会議システムを利用したオルタナティブメディアの構築-	新潟国際情報大学/ JICA 北京事務所	
2007	3		評価会議	新潟国際情報大学	

(2006年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

第三期 発展期：2007年4月から2018年3月まで

これまでは国際交流インストラクター事業は新潟国際情報大学の学生のための活動だったが、本期間では敬和学園大学、県立新潟女子短期大学（現新潟県立大学）、上越教育大学、新潟大学の四大学が参画した。これらの大学が参画したことで国際交流インストラクター事業の活動やワークショップの内容にも変化がもたらされたため、第三期を2007年4月から2018年3月までに指定し、これを発展期と名付けた。

また、本期間では各大学が参画していった段階で区切りを設け、以下の四つの時期を指定した。

(1) 2007年4月から2008年3月まで

2007年度より、敬和学園大学が国際交流インストラクター事業に参画したため。

表3 国際交流インストラクター事業年表 発展期(1)：2007年4月～2008年3月

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2007	5	11	イントロダクション（顔合わせ）	新潟国際情報大学	
		23	講演「スペインバルセロナ自治大 ECP 平和教育・人権について」 講師：マリア・カナダス氏	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
		25	「ワークショップ・ファシリテーター講座①」、 講師：桜井高志氏（桜井・法貴グローバル教育研究所代表）	新潟国際情報大学	
	7	2	国際協力論「青年海外協力隊、JICA の活動」 講師：鎌田みどり氏（JICA 新潟支部）	新潟国際情報大学	
		23	国際協力論「顔の見える国際協力について考える」 講師：渡邊順美氏（新潟国際ボランティアセンター事務局長）	新潟国際情報大学	
		31	研修：新潟国際情報大学・敬和大学合同ワークショップ	新潟国際情報大学	
	8	18 20	2007年度国際交流インストラクター委嘱状授与式 ワークショップ御披露目会「パレスチナ・イスラエル」[9. 11]	新潟県国際交流協会	
		21	NUISLIVE 平和学体験講義 ワークショップ実演	新潟県国際交流協会	WS
	9	16	研修「ワークショップ・ファシリテーター講座②」、 講師：桜井高志氏（桜井・法貴グローバル教育研究所）	新潟県国際交流協会	
		30	(財)新潟県国際交流協会との委託事業の終了		
	10	1	文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」による補助事業開始		
		6	「平和ってなにいろ？ポーボキと遊ぼう」ワークショップ参加 講師：ロニー・アレキサンダー氏（神戸大学大学院教授）	クロスパル新潟	
		13 14	「愛の架け橋バザー」（新潟国際ボランティアセンター主催）でのワークショップ実演	新潟市中郵便局	WS
		17	国際交流インストラクター事業全体会議	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2007	10	20 21	紅翔祭（学園祭）でのワークショップ実演	新潟国際情報大学	WS
		26 27 28	「食と花の世界フォーラムにいがた2007」（食と花の世界フォーラム実行委員会主催）でのワークショップ実践	朱鷺メッセ	WS
2008	1	29	研修「学校教育における国際理解教育」 講師：釜田聡先生（上越教育大学学校教育総合研究センター准教授）	新潟国際情報大学	
		30 2.1	合宿研修 松本ますみ先生（敬和大学人文学部教授）による講評	新潟県阿賀町	
	3	5	国際交流インストラクター事業評価小委員会	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
		13	国際交流インストラクター事業評価大委員会	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	

（2007年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成）

(2) 2008年4月から2012年3月まで

2008年度より、県立新潟女子短期大学（現新潟県立大学）が国際交流インストラクター事業に参画したため。

表4 国際交流インストラクター事業年表 発展期(2)：2008年4月～2012年3月

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考	
2008	4	14	「国際交流インストラクター演習1」開講	新潟国際情報大学		
		5	6	DAWN 講演会	新潟市立黒埼南小学校	
				DAWN 劇団「あけぼの」子どもミュージカル新潟講演	クロスバル新潟	
		7	研修「日本社会とJFC（Japanese Filipino Children）」 講師：小ヶ谷千穂先生（横浜国立大学准教授）	新潟国際情報大学		
		11	G8労働大臣会合記念講演会「児童労働って何だろう？」 （主催：新潟国際ボランティアセンター G8プロジェクト実行委員会）	新潟県教職員組合会館		
		12	研修「ファシリテーション入門講座」 講師：ちょんせいこ氏（人まちファシリテーション工房代表）	新潟国際情報大学		
		28 29	各教員によるテーマミニ講義 「多文化」池田嘉郎先生 「子どもから見える世界」佐々木寛先生 「遠くて近い世界」佐々木寛先生 「食から見える世界」小林元裕先生 「貧困を語る際の留意点いくつか」長坂格先生 「写真から見える世界」越智敏夫先生	新潟国際情報大学		
		31 6.1	ミャンマー・中国被災者支援募金活動（主催：にいがた NGO ネットワーク）への学生有志の参加	古町、万代シティ		
	6	16	研修「ファシリテーター養成講座①」 講師：桜井高志氏（桜井・法貴グローバル教育研究所）	敬和学園大学		
		18	2008年度国際交流インストラクター事業全体会議	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス		
		21	ロシア語スピーチコンテスト（主催：（財）新潟県国際交流協会）でのワークショップ実演	クロスバルにいがた		
		25	講演 Eliazar T. Rose 氏（New Hope 代表） （協力：教育と環境の爽企画室）	新潟国際情報大学		
		30	平山征夫学長による講演	新潟国際情報大学		
	7	14	研修「ファシリテーターのための児童労働ワークショップ講座」 講師：白木朋子氏（特定非営利活動法人 ACE 事務局長）	新潟国際情報大学		
		20	オープンキャンパスでのワークショップ実演	新潟国際情報大学	WS	
		30	「国際交流インストラクター演習1」試験	新潟国際情報大学		

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2008	8	1 2 3	2008年度国際交流インストラクター委任状授与式 「にいがた国際交流フェスタ」(主催:(財)新潟県国際交流協会)でのワークショップ実演 1日: 県立新潟女子短期大学 2日: 敬和学園大学 3日: 新潟国際情報大学	朱鷺メッセ	WS
		4 5 6	「東アジア交流佐渡キャンプ」(主催:日本基督教団)でのワークショップ実演	新潟県佐渡市	WS
		21 22 23	特別合宿研修 「紛争転換の方法:国際交流インストラクター流平和ワーカー養成講座」 講師:奥本京子氏(大阪女学院大学准教授) 「服飾から見た異文化理解:チャイナドレスを事例に」 講師:謝黎氏(放送大学講師)	JICA 地球ひろば広尾、 JICA 東京国際センター	
	9	20 21	「全国ボランティアフェスティバル」(主催:にいがた NGO ネットワーク)への学生有志の参加	朱鷺メッセ	
	10	24	講演 Alay Kapwa (フィリピン NGO)	新潟国際情報大学	
	11	10	研修:JICA 出前講座「本で読めない世界の現実:青年海外協力隊員がみた世界の日常生活—タイ王国編」 講師:山田規史氏(青年海外協力隊 OB)	新潟国際情報大学	
		17	研修:JICA 出前講座「本で読めない世界の現実:青年海外協力隊員がみた世界の日常生活—ガーナ共和国編」 講師:松原孝和氏(青年海外協力隊 OB)	新潟国際情報大学	
	12	24	研修:JICA 出前講座「本で読めない世界の現実:青年海外協力隊員がみた世界の日常生活—ミクロネシア連邦編」 講師:小田敏行氏(青年海外協力隊 OB)	新潟国際情報大学	
			1	研修「教室内の異文化をどう理解するか」 講師:真保美奈子氏(新潟市小中学校派遣員)	新潟国際情報大学
		2	研修「ファシリテーター養成講座②」講師:桜井高志氏	県立女子短期大学	
2009	1	29 30	特別合宿研修 若月章先生(県立女子短期大学教授)による講評	新潟県阿賀町	
		14	講演「旧ユーゴに学ぶ非暴力ワークショップ—紛争下から見えた暴力のリアリティと平和構想の重要性」 講師:エミナ・ブジンキッチ氏(クロアチア平和学センター執行理事)	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
	3	4	国際交流インストラクター事業評価小委員会	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
		13	国際交流インストラクター事業評価大委員会	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
	4	17	「国際交流インストラクター演習2」開講	新潟国際情報大学	
	5	24	研修「グローバル化の波に翻弄されるカンボジア社会」 講師:島村昌浩氏(日本国際ボランティアセンター)	新潟国際情報大学	
		1	「アフガニスタン、イラク、パレスチナにおける戦争の現実と私たち」 講師:谷山博史氏(日本国際ボランティアセンター代表理事)	新潟国際情報大学	
	8	8	講義:「日本の常識・世界の非常識」 講師:羽賀友信氏(長岡市国際交流センター長)	新潟国際情報大学	
		16 17	「からだことばのレッスン」 講師:竹内敏晴氏(演出家、竹内演劇研究所主宰)	赤塚地区公民館	
	6	5	研修:「派遣先教員によるマナー講座」 講師:井口昭夫先生(新潟市立巻南小学校)、 澤谷めぐみ先生(三条市立第二中学校)	新潟国際情報大学	
		12	講義:「ツバルから考える環境問題」 講師:石森大知氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニアフェロー)	新潟国際情報大学	
		8	9	オープンキャンパスでのワークショップ実演	新潟国際情報大学
			10	2009年度国際交流インストラクター委嘱状授与式 研究講演:鈴木諭氏(青年海外協力協会)	新潟国際情報大学

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考	
2009	11	14	現代 GP シンポジウム 「国際理解教育におけるワークショップの導入—国際交流インストラクター事業の成果と課題」	クロスバルにいがた・映像ホール		
		25	講義「コミュニケーションのための発声法」 講師：戸中井三太先生（劇団カタコンベ）	新潟国際情報大学		
	12	26 27	特別合宿研修 黒田俊郎先生（新潟県立大学教授）による講評	新潟県阿賀町		
2010	4	9	2010 年度「国際交流インストラクター演習 1」開講	新潟国際情報大学		
		23 ～ 30	各教員によるテーマミニ講義 「経済から見える世界」安藤潤先生 「世界の不平等」高橋正樹先生 「異文化理解」松尾瑞穂先生 「文化の定義について重要なこと」小宮山智志先生	新潟国際情報大学		
	5	14	研修「ファシリテーター、ワークショップ講座～イントロダクション 希望の教育実践」 講師：新津厚子氏（東京大学大学院総合文化研究科修士課程在籍）	新潟国際情報大学		
		29	三大学合同研修「ファシリテーション入門講座」 講師：ちよんせいこ氏（人まちファシリテーション工房代表） 学生スタッフミーティング（新潟国際情報大学、新潟県立大学、敬和学園大学）	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス		
	6	11	研修：派遣先校担当教員（小中高）によるマナー講座 講師：井口昭夫氏、澤谷めぐみ氏、高橋氏	新潟国際情報大学		
		7	2	研修「コミュニケーションのための発声法」 講師：戸中井三太氏（劇団カタコンベ）	新潟国際情報大学	
	30		「国際交流インストラクター演習 1」試験	新潟国際情報大学		
	8	8	オープンキャンパスでのワークショップ実演（食チーム）	新潟国際情報大学		
	9	9	2010 年度国際交流インストラクター委嘱状授与式 三大学合同研修（レアメタルチーム）	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス		
		24	2010 年度「ワークショップ実践論 1」開講	新潟国際情報大学		
	10			研修：世界の不平等「グローバリゼーションがもたらしたものとその対応策」 講師：北沢洋子氏（日本平和学会理事）	新潟国際情報大学	
			10	研修：異文化理解「世界の食と性差」 講師：河合利光氏（園田学園女子大学教授）	新潟国際情報大学	
		15	新潟県立大学学内反省会	新潟県立大学		
		17	研修：世界の現実「戦争・紛争下における子ども—少年兵—」 講師：下村靖樹氏（フリージャーナリスト）	新潟国際情報大学		
		24	研修：環境「生物多様性と里山の保全」 講師：箕口秀夫先生（新潟大学農学部教授）	新潟国際情報大学		
2011	1	28	特別研修（前期ふりかえりと反省）	新潟国際情報大学		
	3	7	2010 年度国際交流インストラクター事業評価会議	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス		
			2011 年度「国際交流インストラクター演習 2」開講	新潟国際情報大学		
	5	6	講座：ファシリテーション講座 講師：新津厚子氏（東京大学大学院総合文化研究科修士課程在籍）	新潟国際情報大学		
		28	三大学合同研修 「ワークショップ、ファシリテーターとは何か。ファシリテーション実践の方法」 講師：桜井高志氏	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス		
	6	10	派遣先小学校教員による講座	新潟国際情報大学		
		24	講座：ワークショップ「コミュニケーションと発声法」 講師：戸中井三太氏（劇団カタコンベ）	新潟国際情報大学		

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2011	8	8	2011年度国際交流インストラクター委嘱状授与式 三大学合同研修会 「ウガンダのホンマでっか!？」(新潟国際情報大学)「肌色って何色？」(敬和学園大学) 「Not just a building (英語ワークショップ)」(新潟県立大学)	新潟国際情報大学	
		9	2011年度「ワークショップ実践論2」開講	新潟国際情報大学	
	10	7	講義「ワークショップとは何か」(ワークショップ実践論2) 神長英輔先生	新潟国際情報大学	
		14	ワークショップ講座「非暴力トレーニング」 講師：江口昌樹氏(社団法人新潟県地域総合研究所主任研究員)	新潟国際情報大学	
		27	ふれあい合宿 「ウガンダのホンマでっか!？」 「知っとこ!! 私たちの関わる世界の現実」	青少年研修センター	
	11	4	ワークショップ講座「貿易ゲーム」 講師：三上杏里氏(特定非営利活動法人NVC新潟国際ボランティアセンター)	新潟国際情報大学	
		18	講座「まちづくりワークショップ」 講師：相楽治氏(地域中小企業ネットワークアドバイザー)	新潟国際情報大学	
	12	10	2011年度国際交流インストラクター冬季研修会	ホテルぎぶーン	
2012	1	6	講座「トランセンド・ワークショップ」(紛争転換ワークショップ) 講師：奥本京子先生(大阪女学院大学教授)	新潟国際情報大学	
		2	瑞波祭 ワークショップ「貿易ゲーム」 対象：上越教育大学大学院生、留学生	新潟国際情報大学	WS

(2008～2011年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

(3) 2012年4月から2016年3月まで

2012年度より、上越教育大学が国際交流インストラクター事業に参画したため。

表5 国際交流インストラクター事業年表 発展期(3)：2012年4月～2016年3月

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2012	4	5	2012年度「国際交流インストラクター演習1」開講	新潟国際情報大学	
		5	26	四大学合同セミナー 講座「ファシリテーター養成講座」	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス
	7	4	「国際理解教育セミナー」ワークショップ	新潟市自治会館	
		5	講演「アフリカの紛争地を通して見る、人間の業と可能性」 講師：下村靖樹氏(フリージャーナリスト)	新潟国際情報大学	
	8	4	2012年度国際交流インストラクター委嘱状授与式 四大学合同研修会 講演ワークショップ「非暴力トレーニング」 講師：エミナ・ブジンキッチ氏(クロアチア平和学センター執事、クロアチア青年ネットワーク代表)	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
			9	27	2012年度「ワークショップ実践論1」開講
	10	3	ふれあい合宿 「世界のストリートから」 「女はズボン!? 男はスカート!? ～身近な世界の異文化理解～」	新潟県立青少年研修センター	
			25	講演「まちづくりワークショップ」 講師：林炳大氏(林行政法務事務所)	新潟国際情報大学
		8	講演ワークショップ「非暴力トレーニング」 講師：江口昌樹先生(敬和学園大学講師)	新潟国際情報大学	
		22	講演「コミュニケーション・ワークショップ」 講師：戸中井三太氏(劇団カタコンベ)	新潟国際情報大学	
	12	18	JICA ボランティアセミナー	新潟国際情報大学	

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2012	12	20	講演「教育ファシリテーション」 講師：小見まいこ氏（みらいず works 代表）	新潟国際情報大学	
		22	国際交流インストラクター冬季研修会・合宿		
2013	3	26	2012年度国際交流インストラクター事業評価会議	新潟国際情報大学	
		4	4	2013年度『国際交流インストラクター演習2』開講	新潟国際情報大学
		25	講座「ファシリテーション講座」 講師：小見まいこ氏、本間莉恵氏（みらいず works）	新潟国際情報大学	
	6	1	四大学合同セミナー「ファシリテーター養成講座」 講師：多田孝志先生（目白大学教授）	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
		27	講演「こども達の可能性を広げる国際理解～フィリピン19年の活動経験から」 講師：横田宗氏（NPO法人アクション代表）	新潟国際情報大学	
		28	JICA ボランティアセミナー	新潟国際情報大学	
	8	3	2013年度国際交流インストラクター委任状授与式 各大学ワークショップ披露会		
		26	2013年度「ワークショップ実践論2」開講	新潟国際情報大学	
	10	24	講座「コミュニケーションの原則」 講師：小松弘美氏（コーチエンタープライズ）	新潟国際情報大学	
	11	21	講座「コミュニケーション・ワークショップ」 講師：戸中井三太氏（劇団カタコンベ）	新潟国際情報大学	
12	19	講座「多文化共生ワークショップ」 講師：横山由美子氏（公益財団法人日本YWCA 副会長）	新潟国際情報大学		
2014	1	9	講座「国際協力の現場から～アフガニстанを事例に」 講師：長谷部高俊氏（JVC 東京事務所事務局長）	新潟国際情報大学	
		4	2014年度『国際交流インストラクター演習1』開講	新潟国際情報大学	
	5	31	講座「ファシリテーション講座」 講師：中野民夫氏（同志社大学教授）	新潟国際情報大学	
	6	19	講座「730日間のハママスLife～私のバブアニューギニア奮闘記」 講師：本田龍輔氏（JICA 新潟デスク）	新潟国際情報大学	
	8	9	2014年度国際交流インストラクター委任状授与式 講座「国際理解教育とは何か」 講師：角田尚子氏（ERIC 国際理解教育センター代表）	クロスバルにいがた	
		9	2014年度「ワークショップ実践論1」開講	新潟国際情報大学	
	10	23	講座「コミュニケーションの基礎～豊かな対話を目指して（ファシリテーション入門編）」 講師：黒崎晋司氏（株式会社黒崎事務所代表取締役）	新潟国際情報大学	
	11	27	講座「時代の贈り物」 講師：池住義憲氏（立教大学特任教授）	新潟国際情報大学	
	12	4	講座「Noism からだワークショップ」 講師：山田勇氣氏（Noism ダンサー）	新潟国際情報大学	
2015	4	2015年度「国際交流インストラクター演習2」開講	新潟国際情報大学		
		6	6	講座「まちづくり“異”心伝心（ワークショップ・ファシリテーション講座）」 講師：延藤安弘氏（NPO法人まちの縁側育み隊代表理事）	新潟国際情報大学
	7	2	講座「“現場”から考えるということ～イラクの事例から」 講師：池田未樹氏（JVC イラク担当）	新潟国際情報大学	
	8	23	2015年度国際交流インストラクター委嘱状授与式	朱鷺メッセ	
	9	2015年度「ワークショップ実践論2」開講	新潟国際情報大学		
	11	12	講座「演技感覚をベースにしたコミュニケーションの実践」 講師：戸中井三太氏（i-MEDIA 国際映像メディア専門学校非常勤講師）	新潟国際情報大学	
		19	講座「実りある会議の進め方～入門編」 講師：黒崎晋司氏（株式会社黒崎事務所代表取締役）	新潟国際情報大学	

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2015	12	3	講座「伝統芸能『スバエク・トム』から考える、カンボジアの人々の暮らしとリズム」 講師：福富友子氏（上智大学講師）	新潟国際情報大学	
		17	講座「ファシリテーション基礎講座」 講師：青木将幸氏（青木将幸ファシリテーター事務所代表）	新潟国際情報大学	

(2012～2015年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

(4) 2016年4月から2018年3月まで

2018年度より、新潟大学が国際交流インストラクター事業に参画したため。

表6 国際交流インストラクター事業年表 発展期(4)：2016年4月～2018年3月

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2016	4		2016年度「国際交流インストラクター演習1」開講	新潟国際情報大学	
		5	五大学合同セミナー 講座「ワークショップ入門」 講師：青木将幸氏（青木将幸ファシリテーター事務所代表）	新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス	
	6	2	講座「アフリカの紛争地で見えた人間の闇と光」 講師：下村靖樹氏（フリージャーナリスト）	新潟国際情報大学	
		30	講演「SDGsと開発教育」 講師：田中治彦氏（上智大学教授）	新潟国際情報大学	
	8	20	2016年度国際交流インストラクター委嘱状授与式	朱鷺メッセ	
	9		2016年度「ワークショップ実践論1」開講	新潟国際情報大学	
	10	20	講座「あるものさがしワークショップ」 講師：池田博俊氏（新潟青陵大学地域貢献センター）	新潟国際情報大学	
	12	22	講座「KAOSPILOTに学ぶ、創造性を引き出すワークショップとは？」 講師：大本綾氏（株式会社レア共同代表）	新潟国際情報大学	
	2017	4	13	2017年度「国際交流インストラクター演習2」開講	新潟国際情報大学
5			11	講座「990円のジーンズがつくれるのはなぜ？」 講師：長田華子氏（茨城大学准教授）	新潟国際情報大学
		13	五大学合同セミナー 講座「国際理解ワークショップの進め方～ファシリテーション実践の方法」 講師：桜井高志氏（桜井・法貴グローバル教育研究所代表）	新潟国際情報大学 中央キャンパス	
			6	15	講座「ファシリテーター養成講座」 講師：石川一喜氏（拓殖大学准教授）
8		19	2017年度国際交流インストラクター委嘱状授与式	朱鷺メッセ	
9		21	2017年度「ワークショップ実践論2」開講	新潟国際情報大学	
11		2	講座「自然と人、人と人をつなぐインタープリテーション」 講師：増田直広氏（公益財団法人キープ協会）	新潟国際情報大学	
		16	講座「会議ファシリテーションにおける構造化と合意形成のスキル」 講師：堀公俊氏（堀公俊事務所代表）	新潟国際情報大学	
12		7	講座「ほぐす・つながる・つくる～カラダを奏でる／非言語コミュニケーションと身体表現」 講師：新井英夫氏（ダンスラボカラダカラ代表）	新潟国際情報大学	
2018	1	11	講座「NPWの学校 スメ皮のバッチワーク」 講師：古本浩氏（NPWワークショップ講師）	新潟国際情報大学	

(2016、2017年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

第四期 変革期：2018年4月から2020年12月現在まで

2017年度までは「国際交流インストラクター」の名称で活動をしていたが、2018年度より「国

国際交流ファシリテーター」へ名称変更した。国際交流インストラクター事業を立ち上げた2005年の当初は「ファシリテーター」という言葉が周知されておらず、類語の「インストラクター」を採用していた。しかし、発足から15年が経過する中で時代の流れは大きく変化し、教育、企業、福祉、まちづくりなど様々な場でファシリテーターが求められ、ファシリテーターという言葉が周知のものへと変わったため、本来の事業の目的と名称を一致させるために名称変更が行われた。

また、2019年度にはカリキュラムが改定され、前期に「ファシリテーション概論」が開講された。これにより、国際交流ファシリテーターをめざす学生は、前期に「ファシリテーション概論」と「国際交流ファシリテーター1・2」、後期に「ファシリテーション実践論1・2」を履修するほか、国際理解教育に関連する指定の基礎科目または専門科目を1科目履修することになったため、ファシリテーションにおける質的向上に繋がった。

以上のことから、第四期を2018年4月から2020年12月現在までに指定し、これを変革期と名付けた。

表7 国際交流ファシリテーター事業年表 変革期：2018年4月～2020年12月現在

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2018	4	1	「国際交流インストラクター」から「国際交流ファシリテーター」へ名称変更		
		12	2018年度「国際交流ファシリテーター演習1」開講	新潟国際情報大学	
	6	3	五大学合同セミナー 講座「『貿易ゲーム』～ファシリテーションの極意とは～」、「世界をもっと知るために～SDGsとESD」 講師：大津和子氏（北海道大学名誉教授）	新潟国際情報大学	
		21	講座「朝鮮学校の歴史と現状」 講師：金鐘海氏（新潟朝鮮初中級学校校長）	新潟国際情報大学	
	7	5	講座「NGOが見た紛争のリアリティと平和のイニシアティブ」 講師：谷山博史氏（日本国際ボランティアセンター代表理事）	新潟国際情報大学	
	8	19	2018年度国際交流ファシリテーター委嘱状授与式	新潟国際情報大学 中央キャンパス	
	9	27	2018年度「ワークショップ実践論1」開講	新潟国際情報大学	
	11	15	講座「コミュニケーションとアート」 講師：黒瀬陽平（ゲンロン カオス＊ラウンジ新技術校主任講師）	新潟国際情報大学	
		29	講座「Noismからだワークショップ」 講師：山田勇氣氏（Noismダンサー）	新潟国際情報大学	
	12	6	講座「創り出すファシリテーション」 講師：田村洋一氏・森山千賀子氏（メタノイア・リミテッド）	新潟国際情報大学	
2019	4	11	2019年度「国際交流ファシリテーター2」開講	新潟国際情報大学	
		12	新たに「ファシリテーション概論」を開講	新潟国際情報大学	
	5	16	講座「移住者の電話相談からみえること」 講師：橋本瑞江氏（ヘルプの会）	新潟国際情報大学	
		23	講座「世界の不平等とフェアトレード」 講師：佐藤孝輔氏・岡田篤志氏（新潟フェアトレード推進委員会共同代表）	新潟国際情報大学	
	8	11	五大学合同セミナー 講座「アドベンチャーアプローチから見るファシリテーション」 講師：難波克己氏（Adventure Design 代表）	新潟国際情報大学	
		26	2019年度国際交流ファシリテーター委嘱状授与式 講座「学び合う場をつくるファシリテーション」 講師：中野民夫氏（東京工業大学リーダーシップ教育院・リベラルアーツ研究教育院教授）	朱鷺メッセ	
	9	26	2019年度「ファシリテーション実践論2」開講	新潟国際情報大学	

西暦	月	日	主なできごと	会場等	備考
2019	10	17	講座「the Binning」 講師：出野紀子氏（株式会社 studio-L コミュニティデザイナー）	新潟国際情報大学	
	11	7	講座「発声トレーニング」 講師：戸中井三太氏（i-MEDIA 国際映像メディア専門学校非常勤講師）	新潟国際情報大学	
	12	12	講座「壁画ワークショップ」 講師：新津厚子氏（群馬大学非常勤講師）	新潟国際情報大学	
		26	講座「すごい会議の方法」 講師：大橋禪太郎氏（すごい会議代表）	新潟国際情報大学	
2020	4		新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度「国際交流ファシリテーター1」開講を9月に変更	新潟国際情報大学	
	9	24	2020年度「国際交流ファシリテーター1」開講	新潟国際情報大学	
		25	2020年度「ファシリテーション概論」開講	新潟国際情報大学	
	10	8	講座「オンラインワークショップ」 講師：青木将幸氏（青木将幸ファシリテーター事務所代表）	オンライン	
	11	4	講座「山崎亮×大学生」 講師：山崎亮氏（studio-L 代表取締役）	クロスバール新潟	
		29	2020年度国際交流ファシリテーター委嘱状授与式 講座「やってみよう！オンラインファシリテーション」 講師：ちよんせいこ氏（株式会社ひとまち）	オンライン	
	12	10	講座「環境教育ワークショップ」 講師：小原賢二氏（株式会社ホールアース）	新潟国際情報大学	

(2018、2019年度国際交流インストラクター事業報告書より筆者作成)

以上の萌芽期、基盤準備期、発展期、変革期の4つの期間を経て、新潟国際情報大学が立ち上げた「国際交流インストラクター」は、現在5大学が参画する「国際交流ファシリテーター」へと大成長を遂げていった。

国際交流ファシリテーターの現状

羽田幸恵（本事業推進員）

本節では国際交流ファシリテーターの現状を過去の延べ人数や派遣先の観点からまとめておく。

「国際交流ファシリテーター」事業は2005年に新潟国際情報大学（以下、本学）と公益財団法人新潟県国際交流協会などとの協働企画「国際交流インストラクター」として始まった事業である。現在は2018年度から「国際交流ファシリテーター」と改称し事業を継続している。

本事業は2007年から、教員だけでなく推進員が加わり充実した体制を整えた。2007年から2009年まで新津厚子氏、2010年を野澤紘子氏、2011年から2015年5月まで河田陽介氏、そして2015年6月から現在まで宮本裕美、中原滯佳、羽田幸恵の体制となっている。推進委員はいずれも本学の卒業生であるだけでなく、本事業の経験者で占められている。

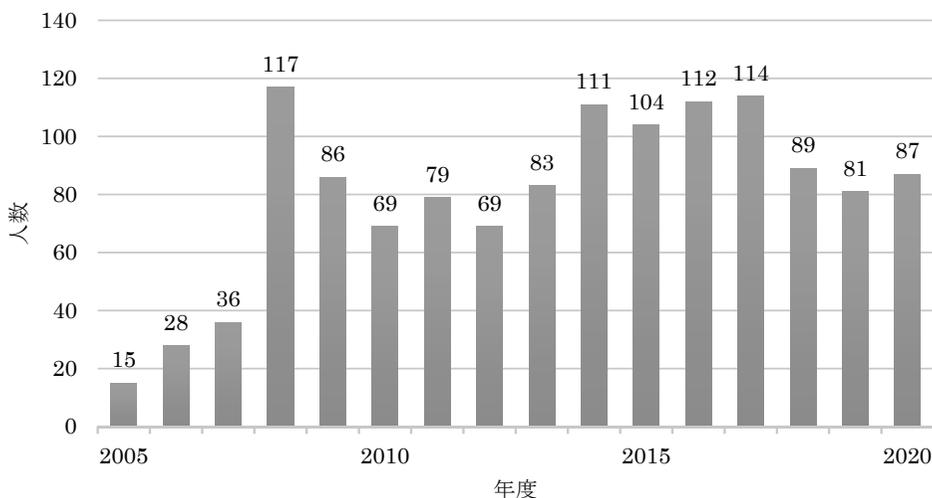


図1 年度別ファシリテーター数²

図1は2020年度11月までに「国際交流ファシリテーター」として新潟県国際交流協会から認定を受けた延べ人数である。2005年は本学学生のみで15名で始まったが、2007年からは敬和学園大学が、翌年の2008年には県立新潟女子短期大学（2009年より新潟県立大学）が参加し3大学の合同事業となり規模を大きくした。さらに、2012年・2015年には上越教育大学が、2018年

² 全大学のファシリテーター数を示す。

からは新潟大学が加わり、新潟県内の5大学の学生を養成する事業となった。

表8 年度別派遣校数とワークショップ数

	派遣校数	ワークショップ数 ³	参加大学、事業関連事項
2005年(平成17年)	0校、1団体 ⁴	5回	
2006年(平成18年)	10校	20回	
2007年(平成19年)	29校	32回	敬和学園大学、 本事業が「現代GP ⁵ 」に採 択される
2008年(平成20年)	24校	33回	県立短期大学
2009年(平成21年)	23校、2団体 ⁶	24回	(新潟県立大学に改名)
2010年(平成22年)	25校、2団体	33回	
2011年(平成23年)	26校、1団体	50回	
2012年(平成24年)	22校、2団体	49回	上越教育大学
2013年(平成25年)	24校、2団体	57回	
2014年(平成26年)	32校	68回	上越教育大学、休止
2015年(平成27年)	33校	69回	上越教育大学、再開
2016年(平成28年)	28校	60回	新潟大学
2017年(平成29年)	32校	68回	
2018年(平成30年)	31校	88回	
2019年(令和元年)	33校、1団体	74回	
2020年(令和2年)	2021年2月に実施するため未確定 ⁷		

(2005年度から2019年度国際交流ファシリテーター事業報告書より筆者作成)

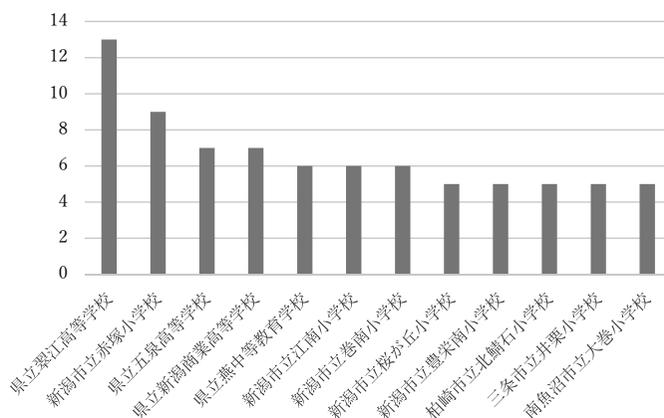


図2 派遣校リピート回数上位校

(2005年度から2019年度国際交流事業報告書より筆者作成)

³ 2005年から2009年までは本学のワークショップ数のみを掲載。以降は、他大学のワークショップ数も含む。

⁴ 新潟県立万代島美術館において一般参加者を対象に国際理解ワークショップを実施した。

⁵ 文部科学省の「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」のこと。本事業は、2007年度から2009年度までの3年間補助事業として採択された。

⁶ 派遣先として学校ではなく、地域主催のイベントで児童・生徒を対象にワークショップを行ったことを示す。

⁷ 2007年度から派遣時期を前期(9月)と後期(2月)の2期で行って来たが、新型コロナウイルスの影響により、2020年度の前期派遣は中止となった。

表8は、年度別派遣校数とそれに伴うワークショップ数、各大学が参加した年数と関連事項を表したものである。2020年を除いた過去15年間の中で最多の派遣受け入れ数は、新潟県立新潟翠江高等学校の13回、新潟市立赤塚小学校の9回、新潟県立五泉高等学校、新潟県立新潟商業高等学校の7回となっている(図2を参照)。また、これら以外の派遣受け入れ校の中には、複数回ワークショップを実施している学校もある⁸。この間、参加者数は記録の残る2006年度から2019年度までを数えると約1万6,550人となっている。

本事業発足当初から現時点までの派遣数とワークショップ数の増加傾向にはいくつかの要因が推測できるが、本事業の実施体制が強固に構築されていることもそのうちの一つに挙げられる。「国際交流ファシリテーター」として認定された学生たちが派遣先でのワークショップ実施後は、毎回参加児童・生徒とその担当教職員にアンケートを受けてもらいそれを踏まえて改善していく。それらを新潟県国際交流協会が統括・分析し、毎年度末に開催される評価会議⁹にて事業の取り組み内容を評価・改善していく体制が整っている。

また、本事業の目的の一つに地域社会の国際化・活性化を目指す点がある。先に挙げた派遣受け入れ校は、本学からの距離も近く、まさしく地域に根差した活動を行っていると言えるのではないだろうか。現在では各大学から近い距離の派遣先を担当することが多いのだが、現在のよう
に5大学と規模が大きくなる前から本学より距離の遠い派遣先への度重なるワークショップも、年々派遣校数とワークショップ回数が増加している要因とも考えられるだろう。その他の要因については稿を改めることにする。

⁸ 例えば、同時刻に複数グループが同時に別々のクラスでワークショップを実施したり、同じグループが同一校で複数回ワークショップを実施したりすることである。

近年、同一校において数日間一つのテーマを同じチームが担当し、国際理解を深めるワークショップを実施することも増えている。

⁹ 新潟県国際交流協会と参加大学の専任アドバイザーから構成される。

「国際交流ファシリテーター」事業とパウロ・フレイレの思想

中原滯佳（本事業推進員）

本節では、国際交流ファシリテーターが一貫して目指してきたファシリテーター像を、本事業理念の源流のひとつであるブラジルの哲学者、パウロ・フレイレの思想のなかから読み解いてみたい。国際交流ファシリテーターは、2019年に国際交流「インストラクター」という名称から国際交流「ファシリテーター」へと変更された。「インストラクター」という言葉は教える－教えられるという関係を想起させてしまうために、学びや対話を促進する役割という意味での「ファシリテーター」に変更した。この名称変更はここ20年で「ファシリテーター」という言葉が一般的に普及してきたことにもよるものである。では、「ファシリテーター」とはどのような存在なのか。「ファシリテーション」はまちづくり、会議、アート、教育などさまざまな分野で用いられているが¹⁰、「国際交流ファシリテーター」は教育事業であるため、ここでは教育におけるファシリテーターのあり方に限定して論じる。

パウロ・フレイレの思想がファシリテーションあるいはワークショップの源流のひとつと言われていることはすでに多くの研究からも明らかである。しかし、フレイレはいわゆる「ファシリテーター」というものにはつねに懐疑的であったこともまた事実である。そのことについて詳しく述べる前に、まずフレイレが教育についてどのように考えていたのかを簡単に説明する。

2つの教育——支配の教育・解放の教育——

フレイレはいわゆる知識暗記型の教育を「銀行型教育」として一貫して批判してきた。それは単に学習者に知識を暗記させるということだけにとどまらない。銀行型教育は、学習者に一方的に既成の知識を詰め込むことで、いまの現実があたかも静的で揺るがないものかのように信じ込ませる。それと同時に、学習者の世界までも固定し、いまある世界を「そういうものだ」と思わせてしまう。その結果、学習者はいまの社会を受け入れ、「そういうものだ」と思った社会のなかに適応し、生きていく。それはいまある社会で恩恵を受けている一部の特権層に資する教育であり、それをフレイレは「支配の教育」と呼ぶ。フレイレの言葉でいうならば、「生徒の創造力を最小限に抑え、摘み取り、かれらの軽信をあおりたてる銀行型教育の機能は、世界を解明したいとも思わなければ、それが変革されるのを見たいとも思わない抑圧者の利益に仕えるものである¹¹」。

その一方で、フレイレは「課題提起教育」を目指した。課題提起教育は銀行型教育でみられるような、絶対的に無知な学習者も、なんでも知っている教育者も存在しない。フレイレ研究者の野元弘幸の言葉を借りれば、課題提起教育は水平関係のなかで、学習者も教育者も「ともに認識の主体として世界・社会の課題と向き合い、ともに認識を深め行動していく¹²」。また、銀行型

¹⁰ 詳しくは堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞出版社、2018年、42頁-44頁を参照のこと。

¹¹ パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』（小沢有作他訳）亜紀書房、1979年、69頁。

¹² 野元弘幸「夢と希望を語り続けた教育者」『月刊社会教育』第41巻、1997年、50頁。

教育は一方的な伝達によっておこなわれるのに対して、課題提起教育は対話によっておこなわれる。対話をつうじて、教育者も学習者ともに認識の主体として、たがいに教え、学ぶ。学習者の主体性を奪い、いまある世界に順応するよう飼い慣らしてしまう「支配の教育」とは異なり、教育者も学習者も両者が主体となり、世界に向き合う課題提起教育を「解放の教育」とフレイレは呼ぶ。それは、これまで銀行型教育で奪われてきた学習者の主体を解放する教育である。

解放の実践としての国際交流ファシリテーター

フレイレは学習者に一方的に語りかけ、知識を頭に詰め込んでいくだけの教育を「銀行型教育」として批判し、それを担う教師のことも同様に批判する。しかし、一見銀行型教育の対局にあると思われる「ファシリテーター」による教育についてもフレイレは批判的だった¹³。「ファシリテーター」は知識を詰め込むことも、一方的に伝達しつづけることもしない。むしろ、「ファシリテーターは教えない。先生ではないし、上に立って命令する指導者でもない。その代わり、支援し、促進する。場を作り、つなぎ、取り持つ。そそのかし、引き出し、待つ。共に在り、問いかけ、まとめる¹⁴」。銀行型の教師とはまるで真逆の立場であるように見えるがゆえに、フレイレとファシリテーターはつねに親和的に捉えられている。しかし、先ほども述べたように、フレイレからすると、銀行型の教師も、「ファシリテーター」も同じカテゴリーに属する。

フレイレは「ファシリテーター」が、「私は学習者を尊重しているので、私は指導的にはなれない。学習者は尊重されるべき個人なので、自らの方向性を決定すべきだ」と言うことで、指導性を否定していると批判している¹⁵。つまり、ファシリテーターは、常に一步引いて議論を俯瞰し、参加者に対して指導的であろうとすることを拒否する。しかし、フレイレによると、すべての教育的実践はなんらかの目的を志向しているかぎりにおいて、かならず指導性を有している¹⁶。したがって、指導性を否定し、どちらにも与さない中立的な教育をおこなおうとすることで、社会変革の芽を摘んでおり、フレイレからすれば、結局は支配者たちに資することにしかない。その意味で、銀行型教育と同様の教育に分類される。

さらに、一步引いて議論を俯瞰し、そこに主体的に参加しないことで、「ファシリテーター」は教育実践の主体を引き受けることも否定している。それは学習者とともに社会変革に向けて考え、行動する実践にも関与しないことを意味する。教育実践における対話に介入せず、放任主義的な態度をとることは、学習者と教育者の主体同士の対話によっておこなわれる「課題提起教育」とは異なるものだ。それがフレイレのファシリテーターを批判する理由である。

では、フレイレの思想を踏まえたくて、「国際交流ファシリテーター」とはどのようにあるべきなのか、ひとつの可能性を提示したい。フレイレによれば、「中立的な教育」などは存在しない。いまある社会を無自覚に前提とすることで、支配者の利益に資する教育なのか、それとも、いまある社会を批判的に問いただし、社会の変革に向けて、介入する解放のための教育なのか、

¹³ フレイレはファシリテーターそれ自体を否定していたのではない。フレイレの「ファシリテーター」批判についてここで詳しく記述することには限界があるため、詳しくは、中原滯佳「パウロ・フレイレの〈ワークショップ〉批判—ファシリテーターは教育者か—」新潟大学紀要『現代社会文化研究』第63号、2016年を参照のこと。

¹⁴ 中野民生『ファシリテーション革命』岩波書店、2003年、4頁。

¹⁵ Paulo Freire and Donalddo Macedo "A Dialogue: Culture, Language and Race" *Harvard Educational Review*, Vol. 65, No. 3, 1995, p.378.

¹⁶ *Ibid*, p.378.

そのふたつしか存在しないという。

国際交流ファシリテーターが目指しているのは、世界の不平等や差別などの問題の解決に向けて話し合う場である。そうだとするならば、「国際交流ファシリテーター」は社会や世界の問題を、派遣先の児童・生徒たちと考え、その解決を目指し、社会を変えようとしているという点において、「解放の教育」を実践している。フレイレによると、中立たりえない教育実践では、自分たちの教育実践の目指す方向性を隠すことなく表明すると同時に、自分たちとは異なる立場や意見を尊重すること、そのことをつねに学習者たちに伝えつづけること、そして誠実かつ情熱的にそれらと論争することが教育者には求められる¹⁷。

フレイレは「解放の教育」を実践する教育者のあり方について、「教育者は自らの能動的で好奇心の強い存在が、学習者の存在を教育者の存在の陰に追いやってはならない。そしてまた、教育者も学習者の陰にはなれない¹⁸」という。教育者である「ファシリテーター」自身も派遣先の学習者との対話によって、世界を知りなおし、学び、ともに社会の変革に向かって行動する。つまり、現存する社会を変革するという重要な実践に「国際交流ファシリテーター」みずからも主体として関与することが必要となる。その際、自分たちの教育実践の目指す方向性を表明しつつも、異なる意見や考えを持つ児童・生徒と誠実に議論する。教育の場であるワークショップの空間はあらゆる対話に開かれ、「国際交流ファシリテーター」は派遣先の児童・生徒とともに学びつづけることが求められるのだ。

¹⁷ パウロ・フレイレ『希望の教育学』（里見実訳）太郎次郎社、2001年、111頁。

¹⁸ Freire and Macedo “A Dialogue: Culture, Language and Race” p.379.

AI時代における ファシリテーターの重要性について

小宮山智志（経営情報学部准教授）

8年ほど前にC.B.Frey and M.A. Osbroneによって衝撃的な論文が発表された¹⁹。AIの発展によって10年から20年後には現在の仕事の半分は失われ、そして半数の人は職を失うという主張であった。

いままでの技術革新の歴史を振り返ると一時的に失業者は増えるが、いずれ新しい産業・職業が生まれ、失業者が吸収されていくということも考えられる。しかしAIにはできない仕事をできる人がどのくらいいるのだろうか。新井では人間がAIにできない新しい仕事を創造していく際に必要な能力について以下のように述べている。

重要なのは柔軟になることです。人間らしく、そして生き物らしく柔軟になる。そして、AIが得意な暗記や計算に逃げずに、意味を考えることです。生活の中で、不便に感じていることや困っていることを探すのです。

もちろん、その不便や困っていることが、自分一人だけのことであれば、それはビジネスになりません。「こういうサービスが欲しかった」「ちょうど困っていたのよ!」という人がそれなりにいて、初めて商売は成立します。そういう意味で、これからの時代に起業するのに有利なのは男性よりも女性だろうと思います。一般的に、男性よりも女性のほうが困っていることが多く、しかも他者との共感能力が高いからです²⁰。

他者との高い共感能力によって“人間らしい”“意味”を再発見し、社会の中での困難を解決していく、それがAI時代における新しい仕事を創造していく必要条件であるという主張である。新井は需要が供給を上回る「困ったことを解決」するビジネスを試行錯誤し成功に導くには読解力が必要であるとし、そして読解力が現代の教育には欠けていることを実証している。

確かに読解力を身に付けることは簡単なことではない。しかし現代において“人間らしく、そして生き物らしく柔軟に”“困っていること”を見つけ出す他者との共感能力を身に付けることは、読解力以上に難しいのではないだろうか。ソローのように消費社会から脱却し自然のなかで自由に生活していると気づきも多いかもしれない²¹。しかし現代の消費社会、そしてそれを支える教育を受けてきた私たちにとって「人間らしく、そして生き物らしく柔軟に」意味を発見する能力は、失われがちである。『なぜならあらかじめ設定された教育目標とそれを実現する最良の手

¹⁹ C.B.Frey and M.A. Osbrone, “The Future of Employment:How Susceptible are jobs to Computerrisatin?” *Technological Forecasting and Social Change*, (114), 2013, P.254-280.

²⁰ 新井紀子, 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社, 2018年, 279_80頁.

²¹ Henry David Thoreau, “*Walden; or, Life in the Woods.*” Ticknor and Fields, 1854. (D・ヘンリー・ソロー著, 佐渡谷 重信訳, 『森の生活』講談社, 1991年).

段としての教育方法という枠組み（工場メタファー）で語られる近代特有の学校教育に付随する他律的で操作的な「学習」²²というトレーニングを繰り返すうちに、「視点の異なる複数者の間で知識の意味を再構成」²³ということが苦手になっていることが考えられるためである。さらに困窮している人々ほど、多忙であり生活を振り返り、人間らしい意味を考え、他者との共感している余裕がないという悪循環に陥っているは想像に難くない。

その他者との共感する技術がファシリテーション技術であり、それによって実現されるのがワークショップではないだろうか。ワークショップは、自分が主体（の一員）となり他者と協力して問題解決する意思がある人々にとっては強力な手法である。2012年に東京墨田区の「すみだガバナンスリーダー養成講座」を調査させていただいた。ワークショップの技法を用いて参加者が実際にまちの課題を解決するという講座である。ここでの学びを簡単に箇条書きでまとめたものを一例として示したい。

- ・ワークショップは多様な人々のアイデアを結集できる。
- ・お互いに他者のアイデアに触れることで今までにないアイデアを導出できる。
- ・新しいアイデアが生まれ一人では途方に暮れていたことの解決の方法が見つかる。
- ・だいたいことは試行錯誤しないと解決できないが「自分たちの自分による自分たちのための解決」のため熱量が違う。そのため実際に解決することが実現しやすい（この講座のアイデアは実際に実行された）。

地域に上記のようなファシリテーターがいることで（AIではできない部分も含めて）問題解決され住みよい街となり、多様な人々が集まる。さらに職場においてもファシリテーターによって、多様な価値観から創発が起り、新しいビジネスが生まれる。雇用が生まれることで、さらに地域には人が集まる。職場や地域社会の困りごと（社会構造）は生活の中に直結している。そのため個人の生活の中の困りごとの解決には他者との協力が欠かせないだろう。

「人間らしく、そして生き物らしく柔軟になる。そして、AIが得意な暗記や計算に逃げずに、意味を考えること」²⁴の重要性はAIの以前においても工業社会や情報社会アンチテーゼとして意味を持ってきた。そのため20世紀からワークショップの実践がすでに行われていた²⁵。新潟市においては1995年に新潟県内で参加型のまちづくりに携わる行政、民間の関係者が集まり、「新潟県地域づくり委員会（通称：やぶへびの会）」が発足²⁶している。また日本型ファシリテーションを目指す中小企業中堅社員実修所「点塾」が1984年に新潟市長潟に開設されている²⁷。

²² 広石英記,「ワークショップの学び論：社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義」教育方法学研究 31(0), 2006年, 4頁.

²³ 同上, 5頁

²⁴ 新井紀子,『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社, 2018年, 279頁.

²⁵ 荻宿俊文, [情報教育とワークショップ:1. ワークショップの成り立ちとワークショップの学び],『情報処理』58(10), 2017年, 884-887.

²⁶ まちづくり学校,「理念・成り立ち・体制」『まちづくり学校』（取得日2020年12月31日 <https://machikou.com/>）.

²⁷ 博進堂,「点塾とは」『森の教育実修所』（取得日2020年12月31日 <https://www.hakushindo.jp/tenjuku/>）.

AIがますます発展する時代においては今まで以上に職場、まちづくりはもちろん生活の中にもこそファシリテーターが「遍在」していくことが求められるだろう。国際的な視野で多様な他者の声なき声の困りごとに共感し新しい価値を見出していく国際交流ファシリテーターが毎年、本学から新潟に世界に排出されることで、徐々にではあるが確実に本学の理念である「情報社会を先導し、国・地域・人間の文化を尊重しつつ、国や地域を越えて人類の福祉向上」が実現していくのではないだろうか。

「国際交流ファシリテーター」事業の課題と今後の展望

山田裕史（国際学部准教授）

最後に本節では、15年が経過した国際交流ファシリテーター事業のさらなる質の向上と発展のために、本事業が抱える課題と今後の展望について検討する。

「児童・生徒に国際理解教育を行うことによって、新潟県の国際化・活性化を推進する」という本事業の目的を達成するには、グローバル化する世界が抱える諸問題に関する知識とファシリテーション能力の双方を身につけた学生をいかに養成するかが鍵となる。本学における国際交流ファシリテーターの養成過程をふりかえってみると、近年の本事業が抱える課題として少なくとも次の3点が指摘できる。

1つめの課題は、国際交流ファシリテーターを目指す学生たちの間で、ファシリテーターとしての活動とファシリテーション関連以外の授業科目が有機的に結びついていない点である。本学国際学部の講義科目群は、国際社会を理解するために国際関係論系・地域研究系・日本研究系という3領域から構成されており、ワークショップをつくるうえで不可欠な知識や視点、考え方を提供するものが多い。

ところが、学生たちの間では講義科目で学んだことをワークショップづくりに活かそうという意識や、ワークショップのテーマに関連する講義科目を履修しようという意識が希薄であるように思われる。その結果、ワークショップのテーマ決めに時間を要したり、テーマが決まっても基礎的な知識が十分でないためワークショップの内容が深まらないという問題に直面したりしている。

そこで2019年度からは、指定する13の講義科目のなかから少なくとも1科目履修することを国際交流ファシリテーターになるための要件に加えた。これをきっかけに、今後はワークショップづくりにつながる問題意識を普段の講義科目を通じて醸成し、講義科目の学習意欲も高まることを期待したい。

2つめの課題は、ワークショップで扱う問題に対するこだわりや、ワークショップの内容に「本物感」や「独自性」が弱い点である。スマートフォン1つで世界中の情報が瞬時に得られる現在、ワークショップのテーマを簡単にまとめたウェブサイトや、ワークショップで用いる動画や写真、データなども容易に入手できるようになった。しかし、それらはいわば借り物に過ぎず、自分たちで本当に「見つけた」ものではない。

この点を改善するため、フィールドワークを積極的に行うことが求められる。本学の派遣留学や海外実習で海外へ行く学生は、それが絶好の機会となる。また、グローバル化する現代世界の問題はまさに身近な地域に存在しているのであり、海外へ行く機会のない学生も学外でのフィールドワークを通じて、オリジナリティのある生きた情報を得ることは可能であろう。これらの経験を通じて、ワークショップで扱う問題を「自分ごと化」することができるのではないだろうか。

3つめの課題は、国際交流ファシリテーターの派遣を本学に依頼してくる小・中・高等学校側

のニーズの把握が必ずしも十分でない点である。これまで本事業が注力してきたのは、ワークショップの内容を児童・生徒の年齢に応じたものにしたたり、ワークショップで扱うテーマに関する学習経験の有無を確認したりすることなどであった。つまり、国際交流ファシリテーターがワークショップを行う1回の授業ですべてを完結させようとしてきたのであり、そのワークショップが小・中・高等学校側の年間指導計画のなかでどのような位置づけになるのかという点までは考慮できていなかった。

そこで2020年度には、本事業の推進員が中心となって小・中・高等学校の学習指導要領を細部まで読み込み、各教科や各学年の目標に応じた内容のワークショップを提供するための準備に着手した。また、2020年度から本格的な実施を迎えた新学習指導要領において「持続可能な社会の創り手の育成」が明記されたことも踏まえ、ワークショップのテーマが持続可能な開発目標(SDGs)のどの目標やターゲットに関連しているのかを意識しながらワークショップづくりを進めている。

以上のように、15年が経過した本事業は課題を抱えつつも着実に前進を続けているといえよう。

今後は、本節の冒頭に示した本事業の目的を達成するだけでなく、学生たちがワークショップ以外の場でもファシリテーションを積極的に活用できるようになることを目指す必要がある。現状では、ワークショップ中のファシリテーションはうまくできても、チーム内の人間関係のファシリテーションや、ワークショップをつくるための会議のファシリテーションがうまくできないという学生も少なくない。

社会の複雑化と価値観の多様化にともない、ファシリテーション能力はワークショップに限らず日常のさまざまな場で必要とされるようになってきている。ひとりでも多くの学生が、人間関係や組織、地域、そして社会を良い方向へ変革するための手段としてファシリテーションを活用できるようになることが期待される。